

## 『ものあはれ』と日本の美』展覧会

山内 裕子

過日『ものあはれ』と日本の美』展をサントリー美術館にて見き。本居宣長の書き記したる『紫文要領』稿本は二百五十年前のものなり。書き加へ或は削ぎたる跡に宣長苦心の時の流れ深く覺ゆ。嘗て小林秀雄も伊勢松坂に記念館を訪ね其の御跡を慕ひ給ふ。「物のあはれを知る事の深きにすぐるといふ事はなきものなり」の小林の色紙あり。川端康成の雪月花の書も在り。源氏繪の心のときめきも哀しみも西行の歌に寄する繪も「ものあはれ」更に深く表る。五節句を彩る明治期の蒔繪の工藝品もまた粹なるものなり。四季の移ろひに和する簡素なる美こそ貴けれ。

平成二十五年六月十七日

## 追悼 歌舞伎名優十二代目市川團十郎丈

宮崎 淳一郎

西暦二〇一三年、平成二十五年二月三日、江戸歌舞伎市川宗家成田屋、十二代目市川團十郎丈、肺炎により逝去し給へり。行年六十六。本年、平成二十五年四月來べき東京新築歌舞伎座、柿葺落し興行を待たず、歌舞伎界は亦も大黒柱を喪へり。昨師走五日、未だ若き華の名優十八世中村勘三郎丈、行年五十七歳の落花の舞を觀たるも僅か六十日にして、満天下の歌舞伎鬘<sup>ファン</sup>は亦も悲報に哭けり。

十二世團十郎丈、遡る事當時五十七歳、平成十六年の頃、急性前骨髄球性白血病の難病を發症せり。以來筆舌に盡せぬ壯絶なる治療闘病を重ねるも寛解、退院會見の折、十二世曰く「我、無間地獄より生還せり」と虚空を見詰め語りしを忘れ得ざりき。

十二世の父、十一世團十郎(九代目海老藏)は、若かりしより「花の海老さま」と稱せられ、名門音羽屋、六代目尾上菊五郎、飛龍一代播磨屋、初世中村吉右衛門の名優雙壁亡き跡、彼の名立女形成駒屋、六代目中村歌右衛門等と戦後歌舞伎界を牽引せる花の名優なり。然るに十二世、十九歳の折、父十一世は胃癌に因り五十六歳急逝、爲に若くして後ろ盾を喪へり。聊か事情ありて、十二世、其の幼少の折、實母と打ち揃つて歌舞伎觀劇果たすことかなはざりきとや。

爾來、十二世若年にして、成田屋、市川宗家御曹司として重責擔ひ、其の苦衷苦難一方ならず。日頃の後見指導者たる江戸歌舞伎生粹の立役名優にして、所作事名手、彼の二世音羽

屋、尾上松緑伯父の峻烈なる猛稽古は筆舌に盡し難し。嘗て樂屋見舞にて瞥見の折、松緑丈の巨軀を支ふる兩の膝、痣状紫色に凹みたるを見、荒事役者の肉體酷使の様に驚愕せり。然るに十二世、生眞面目なるに、懸命に研鑽修業に勵みよく重責に耐へ、江戸歌舞伎、市川宗家荒事、天下の大役者に大成なせり。想ひ起こすに、十二世若かりし當時、其の世評必ずしも芳しからず。「口跡悪しかり」、「大根役者」などと酷評せらるるも、當時、作家村上元三獨り、「大器なり」と評するを想起せり。然而、其の後市川宗家、十二代目の名聲を確立せるは是正に夢の如くなり。藝風大らかにして旭日の如き大役者の風格に有りて、他の追隨を許さず。是、成田屋荒事の眞髓なりき。

海外二〇〇七年、巴里歌劇座公演にて「勸進帳」賞賛せられ、佛蘭西藝術文化勳章コマンドゥール章を受章せり。而して十二代目長男、現十一代市川海老藏、未だ三十五歳にして、父亡き今、市川宗家を雙肩に擔ふに至れり。此の優、兎角の行状聞くも正に大器なり。聲、顔、姿、三拍子揃ひ、艶技拔きん出づるも精神未だ未熟なりとや。父十二世逝去の今、厳しくも己の重責目覺めたれば、大成の時遠からざらむ。逸材必ずや、成田屋歴代宗家中の大鳳となるも夢にあらざり。故十二世、泉下において微笑む日の來るを信ずるの人、我獨りならむや。龍鳳天下に羽ばたく日々切に待たるる。合掌。

平成二十五年六月十七日